

來住尚彦

名古屋芸術大学学長インタビュー



名古屋芸術大学（北名古屋市）は、今年設立70周年を迎える学校法人名古屋自由学院が運営する芸術系総合大学であり、2つの学部
に5つの領域を抱えた学士課程に加え、大学院修士課程や外国人留学生別科を設置している（在学生数はおよそ2,500名）。

同大学に今春、來住尚彦氏が学長として就任した。來住氏はTBS（TBSホールディングス）を経て一般社団法人アート東京を設立し、国内外で開催されたアートフェア等の企画、プロデュースで手腕を発揮してきた実力派である。大学のトップとして、これまでの経験等を活かし、どのような大学作りを目指すのか。その意気込みについて伺った。

（聞き手は塚本隆編集長）

—学長としては異色の経歴ですね。

來住学長：そうかも知れませんね。TBS時代には音楽番組のディレクター、プロデューサーをしたり、コンプレックスライヴ空間「赤坂BLITZ（あかさかブリッツ）2009～2020年」を立ち上げたりしました。また、エンターテインメント複合施設「赤坂サカス」の企画も手がけました。観客の皆さんが笑顔で後にするためにはどのような企画や演出が必要なのかなどひたすら没頭していました。

また、学長業務と並行してアート東京のエグゼクティブプロデューサーとして来年度開催の大阪関西万博での海外VIPをお迎えするゲストハウスとなる迎賓館内のアートプロデュースも行います。日本の芸術的な感性を見せる空間ですので、ゲストの感想を御伺いするのが今から楽しみです。

—さて、貴学の特色とはどのようなものでしょうか。

來住学長：1970年に開設した名古屋芸術大学を運営する学校法人名古屋自由学院の礎は幼児教育で、1952年に開設した「滝子幼児園」から歴史が始まっています。つまり、幼児教育から生まれた芸術大学であり、この点は他大学の沿革と大きく異なる本学の特色とも言えます。「至誠奉仕」を建学の精神として掲げており、「誠」をもって

世の中のために役立つ人間になってほしいとの創始者の願いが込められているのです。

—今年創立54年目を迎えていますが、貴学の発展の要因は何だと思われますか。

來住学長：幼稚園での学びは、歌や楽器演奏、お絵かきなど、のちに音楽や美術で学ぶ内容が多くを占めています。つまり、多くの人にとって最初の学びは、芸術（人とナニカを共有するという、人にナニカを伝えること）が中心なのです。小学校に入学すると国語や算数などの教科科目が中心の学びとなってしまいますが、幼稚園で学んだ歌や楽器演奏、お絵かきなどは得手不得手は別として皆楽しく触れることができていると思います。幼稚園での学びから芸術大学の設置まで、自然のながれとしてじっくりくるものを感じるのではないのでしょうか。

感性は知識と経験を通じて磨かれていきますが、そのために本学では時代や背景を意識しながら適宜学習環境を見直していることは今日までの本学の発展に大きく寄与していることは疑いのないことだと思っています。

—逆に貴学に課題があるとすれば、それはどのようなものですか。

來住学長：10代半ば過ぎの高校生たちが何を考え、世の中をどのように見て捉えているのかを真剣に考えることが最も大事なことでし課